

## 1. シリーズセミナー「誰が子どものスポーツをささえるのか？」

第  
1  
回

### 子どものスポーツへの保護者の関わり

—ジェンダーと国際比較の観点から—

講師:岡田 千あき 氏

(大阪大学大学院人間科学研究科 教授)

2023年7月31日(月) 19:00~20:30 開催

#### 主な講義内容

##### 1. ジェンダーの観点から

誰が子どものスポーツをささえるのか—日本には特有の「ささえる」形があった。しかし、社会変化の中で形態が変わりつつある。

日本特有のささえ方のひとつが「お茶当番」である。2021年に書いた論文<sup>1)</sup>で、「日本はジェンダーギャップ指数(GGI)の順位が低く、スポーツでもさまざまな場面で色濃く表れている。スポーツ界自体が変わる必要もある」という指摘をした。具体的には学校の部活動、女子マネジャー、お茶当番、フィールドの聖域化(女性が入れない甲子園や大相撲)を取り上げた。論文に対して多くの反響があり、お茶当番に関しては、「子どものスポーツに女性がかかわる時に、父親の顔は見えてこない。パートナーはどうしているのか？」という質問が多く寄せられた。また、「男性は、自分のパートナーがこのような仕事をたくさんさせられる状況で、何も文句を言わないのか？」と聞かれ、海外ならではの考え方だと感じた。

お茶当番の何が問題なのか。子どものスポーツをささえたい人が自主的にささえるならば問題ないが、親の役割や女性・男性の役割を、常識のように決めつけられたり、他者から押し付けられたりする状況には問題があるのではないか。「スタメン問題」として取り上げる研究者もいるが、現場では、頻繁に手伝いに来てくれる保護者の子どもを試合

に出場させたいと考える指導者は一定数みられるのが実情だ。同じぐらいの競技レベルの子どもが複数いる場合、熱心に見にくる親、指導者がよく知る親の子どもを優先させたいという、人情のような心理が働くのかもしれない。

また、お茶当番の話をする時には「同調圧力」という言葉がよく出てくるが、必ずしも日本特有ではない。ただ海外では、保護者の「自分は同調圧力(ピアプレッシャー)を受けている」という認知が非常に高い印象だ。日本の保護者は、自分が置かれた状況が分からずにストレスを感じる、「自分のわがままかもしれない」と思うのが特徴である。

1) Chiaki Okada, 2021, “Can overcoming issues of gender be an Olympic legacy (Commentary): a need for comprehensive change,” *Sport in Society*, 26(1): 147-53.

##### 2. 国際比較の観点から

ここからは、さまざまな国や地域でみてきた子どものスポーツについてお話したい。

###### (1) オランダ

—UNICEF 子どもの幸福度ランキング 1位—

人々がスポーツに関わる時間も長く、複数のクラブチームに所属する人も珍しくない。「半官半民」でクラブチームにも公的な資金がかなり使われて

いる。たとえばサッカーなら、大きな市であれば市内でレベル別に 10 部ぐらいのリーグがあり、本気で取り組みたい人からのんびり楽しみたい人まで、スポーツへの関わり方も選択することができる。一方で若者の地元のクラブチーム離れという課題もみられ、「地域ぐるみは今の時代にあっていない」という声も聞く。

## (2) 香港

—1国2制度、アジアでありながら欧州の文化—

子どもが中学生になるまでは、外出時には必ず大人が付き添うことが法律で決められている。同じ状況は欧米のいくつかの国でもみられ、スポーツにも親が必ず付き添うので、保護者の負担はある。ただ、そこに同調圧力や必須の当番があるわけではなく、親は親同士でゆるいつながりをつくるようだ。

## (3) カンボジア

—経済成長著しい東南アジアの新興国—

経済成長が進み、子どものスポーツの機会も急速に増加している。ただし、ささえる大人の世代は、子どもの頃にあまりスポーツの経験がない。そのため、クラブ運営が不安定である、コーチや審判のレベルが低いなどの課題がみられる。一方で、先進的な取り組みや海外の援助を積極的に取り入れ、政府も代表チームを直接支援している。スポ

ーツが経済成長の中のひとつとして機能してきた事例といえる。

## (4) タンザニア

—地域差、民族差、宗教差が大きい—

1970 年代まで社会主義で、スポーツが非常に盛んであった。しかし政府が予算を削減し、学校における体育やスポーツがなくなってしまった。首都ではスポーツの機会が市場に委ねられたが、それ以外の地域におけるスポーツの機会は、壊滅的に、一気に失われてしまった。2000 年代に入り復活の兆しはみられるが、女性、障害者、地方のスポーツの切り捨てが懸念されている。女子の早期結婚・妊娠が非常に多いため、国際協力機構 (JICA) が政府と協力して「スポーツを通じた女性のエンパワメント」に関わる事業を行っている。

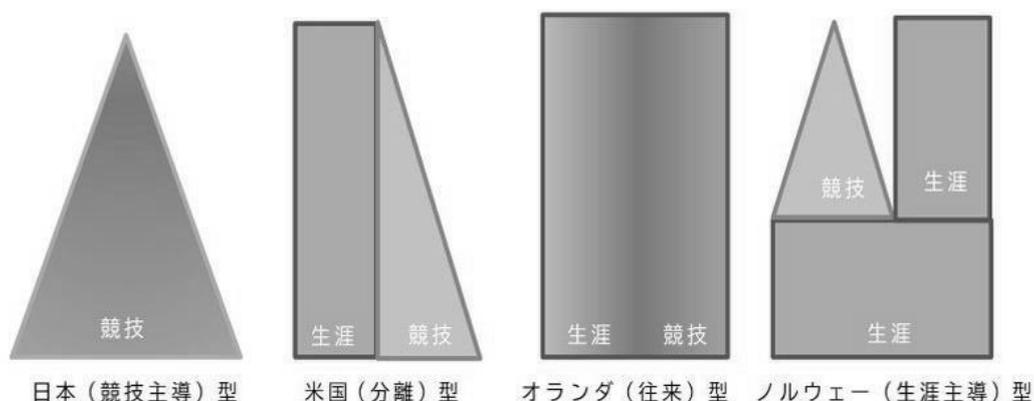
## 3. 競技スポーツと生涯スポーツ(楽しむスポーツ)の関係性

さまざまな国の状況をもとに、図表 1-1 を作成した。図は上に行くほど年齢が上がり、横幅が広いほどスポーツ人口が多い様子を示す。

### (1) 日本型(競技主導型)

基本的には子どもの頃に競技主導で取り組み始めることが多く、どうしても年齢が上がるにつれて参加者の数が減少する。

図表 1-1 競技スポーツと生涯スポーツ(楽しむスポーツ)の関係性



注) 講師が本講演のために作成した図であり、学術研究の成果としては今後修正を要するものとしてご覧いただきたい。

## (2) アメリカ型(分離型)

比較的明確に、競技スポーツと楽しむスポーツとが分かれている。競技スポーツには「セレクション」があり、「トラベルスポーツ」といわれるように、遠方の強いチームと試合をしたりするので、親の関わりも多くお金もかかる。一方、各地域でクラブチームやYMCAなどが楽しむスポーツの場も提供しており、子どもたちにとっては選択肢があるといえる。

## (3) オランダ型(往來型)

オランダについては理解するのが非常に難しい。「グレーゾーン」も広く、大人になってからでも競技スポーツと楽しむスポーツの行き来ができる。

## (4) ノルウェー型(生涯主導型)

多くの種目において、12歳までは記録を残さず、順位をつけないのが特徴である。楽しむスポーツというベースを作った上で、競技力を向上させた人と、生涯スポーツとして続ける人に分かれる。

競技スポーツと生涯スポーツの関係性にはさまざまなパターンがある。この分類がすべてではなく、「このパターンならすべてがうまくいく」ということでもない。競技性との兼ね合いや国民性なども関係するかもしれない、さまざまな模索をする必要がある。

## 4. まとめ

### —誰が子どものスポーツをささえるのか?—

保護者がささえるのがよい/悪いということではなく、課題を整理する必要がある。課題の整理と改善ができれば、ささえる人たちはまだいると思う。保護者以外のアクター(学校や個人、企業や大学など)が少しずつキャパシティを増やしていくことができれば、過度な負担にならずにささえることができるだろう。

また、政府の役割の明確化も重要だ。どこまで市場に委ねるかの議論は難しいが、方針があると

皆が動きやすいとは思ふ。さらにいえば、「そもそも私たちはスポーツに何を求めるのか?」これも人によって、地域によって、時代によって異なると思うので、ぜひ議論したい。

## 質疑応答

Q 4 類型の図について、年齢の上限は何歳ぐらいまでをイメージしているのか。競技スポーツと生涯スポーツの関係性について、もう少し詳しく聞きたい。

A 「体が動く間」「スポーツをしたい間」の年齢をイメージして作成した。ただ種目によっても異なるだろうし、日本が必ずしもすべて「競技主導」と言い切れない部分もあるだろう。

「日本は今の型を崩して新しいものを作ろう」「日本もオランダ型にしよう」という考え方ではなく、「下にもうひとつ加えよう」「横に分割しよう」など、何か変えることで、もう少し楽しくたくさんの人が考えられる方法があるのではないか—そのような意図でこの図を作成した。

Q 4 類型は保護者の関わり方と関係があるのか。

A 競技主導型では、楽しむスポーツに関わりたい保護者は関わるできない。ノルウェー型(生涯主導型)の場合は、よくも悪くも国がある程度の規制をするので、子どもが小さいうちは練習時間や出場機会が制限され、親の関わりも規定される。アメリカ型(分離型)は生涯スポーツと競技スポーツの行き来ができないため、「セレクション」に受かるための指導にお金がかかるという話はよく聞く。

Q この先、日本の手本になる国はどこなのか。

A いずれの類型も一長一短だと思う。私たちがスポーツに何を求めるのか、さまざまなパターンがあるということを議論して、できるだけたくさんの人が、できるだけスポーツを楽しめるような方法を考えるプロセスが重要ではないか。

Q スポーツ(種目)によって競技スポーツと生涯スポーツの図は変わるのか。参照された特定のスポーツや政策があれば知りたい。

A 変わると思う。以前から、日本のスイミングスクールの仕組みに注目している。競技スポーツと生涯スポーツの両方をカバーし、スイミングスクールで育った選手が国際大会でメダルを獲得している。一方で、たくさんの幼児や高齢者もさまざまな目的でスクールに通っており、まさに「老若男女」といえる。

スクールでは段階を追って指導が行われ、4種目をきちんと泳げない限りスピードは求められず、自分のペースで上達していく。すべての地域ではないもののスクールバスがあり、親は「見学スペース」での観覧のみの関わりというところが多い。施設維持の負担は大きいはずだが、ほかの習いごとと比較して極端に高額ではない(コーチの過重労働にささえられている部分があり、必ずしもよいとはいえない場合もある)。ほかのスポーツがスイミングスクールの仕組みに倣うところがあると思う。



岡田 千あき 氏

神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程修了。博士(学術)。

主な研究分野は、スポーツを通じた開発と平和、生涯スポーツ、スポーツ教育学。

国際協力論文コンテストにおいて外務大臣奨励賞。

青年海外協力隊(ジンバブエ)、大阪外国語大学外国語学部助手、講師、准教授を経て現職。

主な著書に、「スポーツで蒔く平和の種 紛争・難民・平和構築」(阪大リーブル)など。

Q 息子が小中高と硬式野球をしているが、主体性とはかけ離れた世界で、指導者と選手・保護者の考え方の溝が深まるばかりだ。どうすればお互いが心地よくなされるのか。

A 指導者の考え方を変えてもらいたくないと思う。今夏の甲子園では変化の兆しも見えたが、いまだに指導者と選手・保護者の関係に上下があるチームがほとんどだ。そのような中で選手や保護者にできることは、チームを選ぶこと、合わないと思ったらチームを移ることはないだろうか。残念な回答にはなるが、「主体性とはかけ離れた世界」が伝統的に続いている場合、個人や数名の力ではなかなか変えられないだろう。

甲子園でみられたような、選手がいきいきとプレーする、そのための指導者と選手の、規律を保った上でのフラットな関係性が多くのチームに広がればよいと思う。「それでも勝てる！」あるいは「それでないと勝てない！」ことが示されて、旧態依然としたチームや指導者が変わってくれるとよいと思う。

第  
**2**  
回

## 〈女子マネ〉と母親の役割の共通項

—女性がスポーツを「ささえる」視点から—

講師: 関 めぐみ 氏

(甲南大学文学部社会学科 講師)

2023年9月13日(水) 19:00~20:30 開催

### 主な講義内容

#### 1. はじめに—誰がささえているのか—

子どものスポーツを「ささえる」人について、図表 1-2 にまとめた。未就学児や小学生は、地域の運営スタッフや保護者がささえる。中高生は主に部活動で、教員や学生スタッフがささえる。大学の部活動では、OB が中心と思われる社会人スタッフと学生スタッフがささえている。

本日の話では、運営スタッフや教員・社会人スタッフというメインでささえる人たちを、さらにその下からささえる「保護者の中の母親」と「学生スタッフの中の女子マネージャー」の共通項を探りたい。

#### 2. 〈女子マネ〉研究からみる「ささえる」役割

女子マネージャーに関する具体的な研究として、日本における X 大学・Y 大学、およびカナダの Z 大学において、フィールドワークやイ

ンタビューを実施してきた<sup>1)</sup>。カナダの Z 大学の部活では、たとえば「ストレングス・アンド・コンディショニングコーチ」(怪我をしない体づくりの指導)、「スタッフセラピスト」(怪我への対処)、「ビデオコーディネーター」(動画撮影)、ほかにも栄養担当、道具担当、採用担当、勉強担当などの仕事があり、主には有償で社会人が担っていた。対して日本の大学の部活では、それらの役割を女子マネージャーが無償で、むしろ部費を払いながら行っている。カナダの状況から考えると、日本の女子マネージャーの仕事には価値がある—すなわち組織運営に不可欠で、有償に値する仕事をしているといえる。

また、日本の女子マネージャーには、活動時間中にグラウンドで担う業務以外の「見えない仕事」が非常に多い。加えて「マネージャーはどのような仕事をしているのか分からない」「するのが当然だ」「自分で選択した」と思われて、階層的には下に位置づけられている場合もある。

1) 講師の女子マネージャーに関する研究の詳細は、以下を参照。

関めぐみ, 2018, 『〈女子マネ〉のエスノグラフィ

「子ども」のスポーツを「ささえる」人

「子ども」段階	未就学児・小学生	中学生・高校生	大学生
活動の場	地域	学校	学校
「ささえる」人	運営スタッフ	教員	社会人スタッフ
	保護者	学生スタッフ	学生スタッフ

母親

共通項?

〈女子マネ〉

図表 1-2 「子ども」のスポーツを「ささえる」人

一:大学運動部における男同士の絆と性差別』  
晃洋書房。

関めぐみ,2023,「大学運動部活動の学生スタッフのための Institutional Ethnography (1): 経験記述から見える組織の一員としての「女子マネージャー」」甲南大學紀要文学編 173,pp.109-121.

### 3. 〈女子マネ〉と母親の役割の共通項

#### —性別分業—

女子マネージャーと母親の役割との共通項は、マネージャーという立場、保護者という立場でありながら、男性か女性かで役割が異なる「性別分業」だと考える。性別分業とは「男性が賃労働、女性が家庭のケア労働を担う近代社会における分業をさす」(山根 2010、p.34)が、そこで想定されるのは対等な関係ではなく、「権力の差がある」関係である。

女性がケア労働<sup>2)</sup>をする理由を、山根(2010)は「女性だから他者のニーズを重視しているのではなく、ケア責任を委ねられている行為者であるからこそ他者のニーズを考慮し、またそこに自分の人生の意味を見つけ出そうとしている」(p.302)ためと指摘する。女子マネージャーも、多くは勧誘をきっかけに入部する。ケアの役割を期待され、「お願いされているし、やってみようかな」という気持ちで関わる例が多かった。

女性がスポーツをささえる理由も、山根の指摘する「(女性が)ケア責任を委ねられている行為者であるから」、端的にいえば女性であるために「あなたがするのは当然でしょ？」という考え方でケア責任が委ねられているからではないか。また、女性が「する」スポーツから離れている実態や、男性の有償労働時間の長さも背景として指摘できる。加えて、そもそものスポ

ーツ組織が、誰かが無償でささえなければ成り立たない制度設計であることも問題だと考える。これをどのように変えていくかがポイントではないだろうか。

2)「ケア労働」という言葉は、本来は看護・介護・育児など、必要なニーズが満たされない立場の人をサポートするという意味で使われる。本講演では、健康な大人をささえるのに「ケア労働」という言葉が適切かという是非も踏まえた上で使用している。

#### 4. おわりに—誰がささえるのか—

ケア労働に関して清水(2022)は「誰かが担わなければならない重要なものであるにもかかわらず、私たちの社会はケア労働の価値を正當に認め、ケアをする人に敬意を払って労働に見合った報酬を支払う、ということをしてこなかった」(pp.114~115)と指摘する。ケアすることへの正當な評価や対等な扱いがなく、一段下に置かれることが問題ではないだろうか。

その状況を変えるために、まず身近なところでは、ささえる人の困っている声に耳を傾けることが重要だ。その時に「女性だから」「母親だから」という「役割」ではなく、何をしなければならないかという「仕事」をリストアップして、誰がどこまで担えるかを考える。そのためには、心理的安全性が担保された組織で、個人が声をあげられる仕組みや環境を整備する必要がある。

誰が子どものスポーツをささえるのか—結局、一人ひとりができることをやるしかないが、それが女性に偏るのは問題ではないか。女性がスポーツをささえることを見込んだ制度設計や、階層的に下位に位置づけられている問題で困っている人がいるのであれば、変えたほう

がよい。

何より大事なものは、「する」人と「ささえる」人の双方にとって、安全・安心な場を確保することである。ガイドラインや法律の制定によって安全を確保すると同時に、種目や競技レベル、地域性などによっても異なる多様な人のニーズをどこまで満たすのかを考えて、個別具体的な考察を深めていく。その二本柱で、それぞれの立場で、「誰が子どものスポーツをささえるのか」を考えることが重要ではないか。

### 参考文献

清水晶子, 2022, 『フェミニズムってなんですか?』文藝春秋。

山根純佳, 2010, 『なぜ女性はケア労働をするのか: 性別分業の再生産を超えて』勁草書房。

## 質疑応答

**Q** 女子マネージャーや母親の競技に対する理解力が高かったら、選手たちは階層的に下にはみないのではないだろうか。

**A** 女子マネージャーはたくさん勉強しても、実際に競技をしている選手とは同じ経験ができない。競技に対する理解力は上がっても、選手たちのように練習後も長い時間携われない状況では、選手から「理解力が高い」とみなされることはなかなか難しいのではないか。同じことを母親に要求するのはさらに難しい。

ささえる人に何かを求めるよりも大事なことは、ささえられている選手が、自分がささえられていることを理解して自分の行動を考えることではないだろうか。

**Q** 女子マネージャーの希望者が増えているように思うが、なぜだろうか。

**A** そもそもマネージャーの研究は非常に少なく、全国調査が行われていないため、「増えている」といえるのかわからない状況である。まずは全国の中学校・高校・大学に、マネージャーや学生スタッフがどれくらいいるのか、その実態や推移を知るための調査をする必要がある。

また実際に「増えている」のだとすると、男女で「する」「見る」「ささえる」が平等に選択できるようになっているのかを考える必要がある。スポーツを「する」と「見る」「ささえる」とは大きく異なる。女性に「する」選択肢よりも「ささえる」選択肢が用意されているのであれば不公平だ。「する」権利が皆に平等に与えられるべきで、そのような観点もふまえて、なぜ「ささえる」を希望する女性が増えているのかを考えたい。

**Q** 女子マネージャーの仕事の内容がきちんと定まっていないことが課題だと思う。組織図においてマネージャーが雑用係ではない位置づけにされているチームはあるのか。

**A** マネージャーが増えすぎて、やらなくてもよい仕事や選手がやるべきことまで行っている実態はある。各チームで、どのような仕事が本当に必要で、それに対してマネージャーは何人必要かを考えるべきだと思う。

調査をした部活では、トレーナーやアナライジングスタッフなどは組織的にも明確な位置づけをされていたが、雑用係の多くの部分はマネージャーの仕事になっているのが現状だ。また、あるマネージャーが、グラウンドでやることなく、仕事ではないもののボールを拾っていた。最初は選手から「ありがとう」と言われたが、続けるうちにやらないと責められるようになった。つまり、ケアの要求レベルが上がり、仕事が無限に増えていく。マネージャーがどこま

ですべきなのか、非常に難しい問題である。

という。

Q 女子マネージャーはいつ、どの種目のどのような場面で誕生したのか。テクニカルやフィジカルなど、明確な役割の必要性が生じ誕生したのか。

3)高井昌吏,2005,『女子マネージャーの誕生とメディア:スポーツ文化におけるジェンダー形成』ミネルヴァ書房.

A 女子マネージャーの歴史については、高井昌吏先生が2005年に出版された本<sup>3)</sup>に詳しく書かれている。高校野球の内容を中心にまとめているその本によると、かつて男子運動部には男子マネージャーしか存在しなかったが、高度経済成長期の1960年代頃に女子が参入していくようになった。それは、大学受験が激化する中で選手の数が減り、男子マネージャーが選手として駆り出されたことで、マネージャーが不足したからである。しかし、女子が担ったのは、男子マネージャーが担っていた監督やコーチのような役割ではなく、雑用および洗濯や食事作りといった女子用の役割であった

Q 24時間スポーツのことだけを考えてやり続けるのが大学スポーツ(アメフト)で、そのために献身的なマネージャーが必要とされる構造自体が日本的なのか、それともカナダを含む世界でも同レベルなのか。

A カナダやアメリカの大学では、国レベルで練習可能な期間や時間が設定されており、長期・長時間練習することができないようになっている。また、脳震盪を起こす可能性のある接触する練習も厳しく制限されている。そのため、日本とは構造が異なり、サポートスタッフの関わりも異なっているといえる。



#### 関めぐみ氏

大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士後期課程修了。博士(人間科学)。専門は社会学、ジェンダー／セクシュアリティ論。京都光華女子大学女性キャリア開発研究センター助教を経て、2020年4月より現職(セミナー後の2024年より甲南大学文学部社会学科准教授)。2017年と2023年に日本スポーツとジェンダー学会学会賞(論文賞)を受賞。主な著書に、『〈女子マネ〉のエスノグラフィー:大学運動部における男同士の絆と性差別』(晃洋書房)など。

第  
**3**  
回

## 子どものスポーツ離れを食い止める

—保護者の負担がない少年野球チーム作りから学ぶ—

講師:中桐 悟 氏

(練馬アークス・ジュニア・ベースボールクラブ 代表)

2023年11月29日(水) 19:00~20:30 開催

### 主な講義内容

#### 1. 練馬アークス・ジュニア・ベースボールクラブ チーム紹介

クラブは2021年4月に設立され、現在は小学1年生から6年生まで約40人が在籍している。東京都練馬区・板橋区にある城北中央公園をメインの活動拠点としており、会費は月に7,300円、活動日は週に1回、活動時間は1回あたり3~4時間である。活動時間に関しては、春日学園少年野球クラブ(つくば市)代表岡本嘉一氏が提唱する「週末1/4(土日を土曜日の午前・午後、日曜日の午前・後に4分割して捉え、週末の4分の1を野球にあてる)」という考え方を採用している。試合に関しては、「PCG(PLAYERS CENTERED GAMES)東京」というリーグに所属している。チームとしては「怒声・罵声の禁止」「育成重視」を標榜し、勝利至上主義にならず、野球を好きになって続けてもらうことを一番のポリシーとしている。また、全日本軟式野球連盟(全軟連)には所属せず独立性を担保したチームである。

チームスタッフには、コーチ、トレーナー、看護師や医療系の有資格者、元プロ野球選手、教員志望や医学部の学生などがいる。それぞれの得意分野を活かしスキルを補完し合いながら、子どもたちの成長を促していく体制が練馬アークスの特徴である。一般的な学童野球

チームよりも年会費が高い分、それに見合ったサポートを提供している。

子どもが楽しく気軽に野球ができるチームにしたいとの考えから保護者の業務負担をなくしており、既存のチーム運営のあり方を否定するものではない。現在チームは多方面から評価いただき、遠方から参加しているメンバーも多い。

#### 2. 保護者の業務負担をなくした方法

チーム運営の基本的な考え方は、無駄なタスクは行わず、必要なタスクはチームのスタッフが担うか外注する。少年野球で保護者の役割になることの多い内容について、どのように対応しているのか順番に紹介する。

「お茶当番」は各自が水筒を持参するため不要と判断した。「怪我等の手当て」は、柔道整復師や看護師の資格を持つスタッフが対応している。「練習補助」は基本的にコーチが担当する。保護者には一切強制はしないが、子どもと一緒に野球を楽しむという観点で、希望する方にはキャッチボールの相手や練習への参加をしてもらっている。「審判」は外部の審判協会をお願いしている。

「広報(SNS、HP)」「活動場所の確保」は私が担当する。「集金」はクレジットカード払いにし、

「情報伝達」は LINE で行う。「配車」(チーム単位での移動のための運転)は、各自が現地集合・現地解散にすることで不要とした。ほかのチームでは「レクリエーション」(ハロウィーン、クリスマス、初詣等)が大変という声も聞かれるが、練馬アークスでは野球と直接関係ないことはやらないというコンセプトで実施していない。

必要なタスクに関してはITを活用し、いかに効率化するかを考えた。たとえば「メンバー募集」は Google に広告を出し、「保護者との連絡手段」にはビジネス用の LINE を利用している。「保護者説明会」は定期的に保護者から質問や意見を募集し、回答した動画を YouTube で配信している。「会計管理」や「名簿管理」にはそれぞれソフトや管理ツールを導入した。「備品・ユニフォームの購入等」は非対面の EC サービスを利用し、「指導ツール」としてタブレットを活用、「指導者の自己研鑽」に関してはサブスクで専用ツールを導入するなど、IT をフル活用している。

### 3. 事前質問への回答

**Q** 負担を嫌がる保護者がいる一方で、熱心なあまり必要以上に介入する保護者も一定数いるのではないかと。

**A** 練馬アークスの場合は、チームの立ち上げ時から今のコンセプトを掲げて Web サイトにも詳細を掲載し、基本的にはそこに賛同する家庭が参加している。素晴らしい野球の経歴を持つ保護者もいるが、頼ってしまうと「保護者の業務的な負担一切なし」というコンセプトが瓦解するのではないかと懸念し、「関わってもらえる場合はお子様の卒業後に」と線引きをして案内している。

**Q** 勝利至上主義の否定を掲げた上で、チー

ムや子ども個人の目標をどのように設定しているのか。

**A** チームとしての目標はひとつで、「みんなで野球を楽しむ」である。「みんな」にはチームメートや試合相手、審判、コーチや指導スタッフも含む。「自分だけが楽しければいい」のではなく、「みんなで楽しむ」を実現するためにどのように行動するのがよいのか、我々も考えながら、普段から子どもたちに懸命に伝えている。

試合の成績などの目標設定はしないが、「野球が楽しいからチームでも家でもさらに練習をし、もっと野球がうまくなり、より楽しくなる」というよい循環がつけられている。練習については正直なところ、3~4 時間では足りないと感じることもあるが、大人も子どもも「もっとやりたい」という気持ちがあるうちにやめておき、子どもの余力を残して能動的なアクションを促したほうがよいのではないかと、思う。

**Q** 指導者の募集をどのように行ったのか。

**A** クラブを立ち上げた際には、私から草野球で出会ったメンバーに声をかけていた。その後は直接 Web サイトからお問い合わせをいただき加入してもらった人もいる。

### 4. まとめ

最初に、新規で立ち上げるチームの運営のポイントや必要な支援に関してまとめる。第一に、都市部における活動場所の確保が大きなハードルであることを指摘したい。現状、週 1 回の活動場所は何とか確保できているものの、非常に苦勞しており、今のところ明確な打ち手はない。第二に、指導者のマッチングの課題を指摘したい。練馬アークスのコーチは月 1 回からの指導が認められ、謝礼も支払われる環境だからこそ関わることができていると思う。たと

えば部活動を引退した高校 3 年生、大学生、月に 1 回ぐらいの指導なら可能な社会人の副業としての指導者、退職したシニア、学校教員の経験者など、条件が合えば指導に携われる人は潜在的にはたくさんいる。そのような方々とチームがうまくマッチングできるようなプラットフォームがあると、子どもの野球をより活性化できるのではないかな。

次に、「子どものスポーツは誰がささえればよいのか」について述べたい。保護者だけでささえるのは現実的に難しい状況で、社会全体でささえることが不可欠である。野球では特に、子どもがやりたいと思っても親がさせられないという話をよく聞く。そこのハードルを下げて、野球に少しでも興味がある子どもを救う仕組みが必要である。日本野球機構(NPB)をはじめとして各競技団体が体験教室を開いているが、その次の受け皿がなく、いきなりチームへの加入となる。現状、その受け皿になっているのが練馬アークスだと思う。

また、野球をやるにはどうしてもお金がかかり、練馬アークスの場合は保護者に負担してもらっている。ただし、すべての地域やクラブにこのような方法がフィットするわけではなく、行政や企業などから資金の支援があればより社会全体でささえる構図が実現できるのではないかと、現場のひとつの意見として思う。

## 質疑応答

Q 試合(PCG 東京)について詳しく教えてほしい。

A PCG は、勝利至上主義ではなく「みんなが成長できるような楽しい野球をやろう」というコンセプトで立ち上げられたリーグである。勝敗を競うだけではなく、ベンチ入りのメンバーが

全員出場したら 1 ポイント、キャッチャーを 3 人以上代えたら 2 ポイントなど、いかにチーム全体で取り組めたかをポイント化する仕組みになっている。ベンチ入りの人数に制限はなく、試合はリーグ戦、学年ごとに投手の球数制限を設けている。

Q 都内の野球チームで、高学年になると受験のためにやめる子どもが多い。練馬アークスでもそのような傾向があるのか、受験との向き合い方を教えてほしい。

A 半分ぐらいは受験をすると聞いている。冬場になると 6 年生の参加頻度は少し減るが、最後まで辞めずに受験と両立する子もいる。活動日が週 1 回という点は、受験の観点でもよいと思う。活動を休むことが悪いとは思っていないので、ほかの用事で欠席や遅刻をするケースも認めている。

Q 指導者の研修について具体的に教えてほしい。

A コーチは基本的に全員が全日本野球協会(BFJ)の公認指導者資格を取るようになっている。そこで指導の平仄ひょうそくを合わせておけば、コーチ間で指導が異なる状況は避けられると思う。加えて定期的にスタッフ間でミーティングを行い、指導方針の認識を合わせるようにしている。

Q プレーに関して怒声・罵声がないのは理解できるが、挨拶や礼儀、野球以外の行動(準備や片付けなど)について指導をする際も怒声・罵声はないのか。その場合、どのように指導をしているか。

A そもそも、いかなる指導をする局面においても怒声や罵声は一切必要ないと考えている。挨拶や礼儀については、諦めずに粘り強く重

要性を説明し続けており、ようやく段々とチーム全体でできるようになってきた。準備や片付けについても、あるべき姿を教えているが、そこに怒声や罵声は一切必要ない。小学生も立派な人間なので、普通に背景や意図を丁寧に説明すれば理解してくれる。

Q 中桐さんが別の地域に新たに同様のチームを立ち上げるならば、まず何から行動するか。

A 今のクラブを立ち上げた時と同様に、まずはチームのコンセプトを決め、ホームページを立ち上げる。ホームページができれば、もうチームは「できた」ということになる。意外に簡単にできる。ホームページをハブにしてそこに掲載されている理念に賛同する指導者や子どもたちが集まってくるイメージである。

Q ポジション、レギュラーなどどのように決めているのかを知りたい。

A 小学生のうちにはポジションを固定せず、すべてのポジションが守れることを理想と考えているので、できるだけたくさんのポジションができるように指導しているが、投手、捕手、一塁手に関しては比較的「専門性が高いポジション」として、本人の希望および適性を考慮して決めている。全員試合に出ることが一つの目標なので、固定のレギュラーをしっかり決めてはいないが、試合に出られる時間の長さは、その

子の野球スキルやチームワークを考慮して総合的に判断する。

Q 今後、クラブを5年、10年存続させるために、代表やコーチをどのように次の方に引き継ぐか、考えていたら教えてほしい。

※「後継者がいない」という質問が複数あった。

A 私は代表の立場だが、週1回だけの活動であることと、必ずしも代表が毎回練習に参加しないといけない決まりがあるわけでもないで、この先も社会の需要があれば、細く長く続けていけると考えている。コーチは年月が経過すれば入れ替わりがあると思うが、私は当クラブを卒業した子どもたちが将来大学生くらいになった時にコーチとして戻ってきてくれることを楽しみにしている。今から「練馬アークスで楽しい野球を教えてもらったので、僕も将来はこの楽しい野球を教える役割を担いたい」と嬉しいことを言ってくれている子が既にいるので、期待している。



#### 中桐 悟氏

三児の父。既存の学童野球チームの運営体制に疑問を感じ、2021年4月にゼロからクラブを立ち上げた。クラブは練馬区、板橋区を拠点に、連盟非所属の独立チームとして活動。「保護者の業務負担一切なし」「罵声や高圧的な指導を完全禁止」「勝利至上主義の否定」など9つの約束を掲げ、野球を通じた子どもの成長を目指す。自身の野球経験は乏しいため必要なリソースを各分野から集めてチームをコーディネートしている。BFJ公認野球指導者<U-12,U-15>資格保有、会社員。

第

4

回

## 「子どもを成長させる大人」五つの条件

講師: 島沢 優子氏

(ジャーナリスト)

2024年5月21日(火) 19:00~20:30 開催

### 主な講義内容

子どもを成長させる大人になるために

#### 1. 「自分の成育歴を整理する」ことが重要

子どもを成長させる大人になるために、指導者も保護者もまずは自分の成育歴を整理してほしい。どのように育てられたかということは、その人の子育てや指導に大きな影響を及ぼす。

事前質問の中に「過保護や暴言等が目立つ保護者に対して、指導者や周囲の保護者ができる工夫はあるか」という問いがあった。皆さんには、暴言が目立つ人、過保護になっている人の背景に注目してほしい。指導者がその保護者を頭ごなしに否定してしまうと、そこには対立の構図しか生まれない。できれば「僕もそういう時期があったよ」「私もそうだったよ」という共感から始めて、「あなたはなぜそういう振る舞いをしてしまうのか」ということを傾聴してほしい。

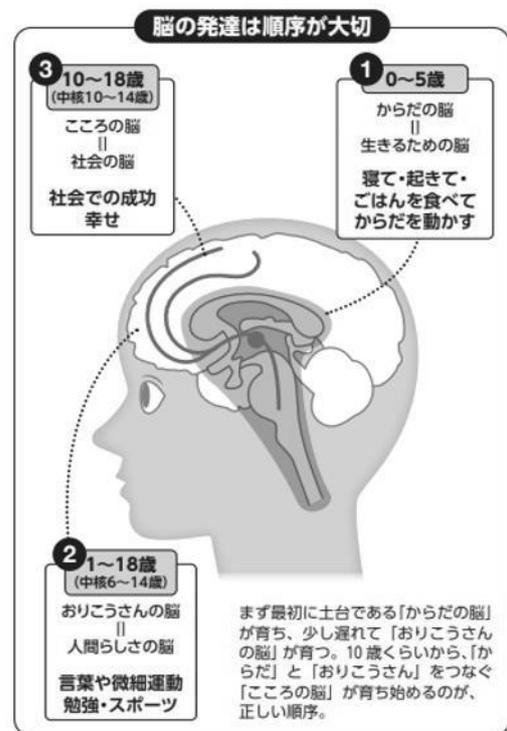
#### 2. 「子育ての軸」「育成の軸」をつくる

次に「家族やチームをどのように育てたいか」「自分たちはどのように運営していくか」を考える。その際に「子育ての軸」「育成の軸」を作ることが重要で、譲れないものを決めたらぶれない強さを持つ。

本日は最低限の軸として3点を紹介したい。

1 つめは早寝早起きである。成田奈緒子氏は、

「からだの脳(生きるための脳)」「おりこうさんの脳(人間らしさの脳)」「こころの脳(社会の脳)」を順に育てることが重要と説く。からだの脳を作るのに不可欠なのが「早寝早起き朝ご飯」である。からだの脳を作っていないうちに無理にスポーツをさせると、最終的にこころの脳が育つ思春期にアンバランスな状態になってしまう。



図表 1-3 脳の発達は順序が大切  
出典 『高学歴親という病』 p.117  
(成田奈緒子著/講談社+α新書)

2 つめは心理的安全である。私たちの脳には、意欲をコントロールする「線條体」がある。子どもの線條体は、リラックスしている時、尊ばれている時、安心していられる時に活発に動き、反対に大人からけなされた時、否定された時、嫌なことを言われた時、理不尽なことをされた時には動かなくなる。

3 つめは主体性である。サッカー指導者の池上正氏が中学生を指導していた時のエピソードがある。大差で負けていた試合中に、選手の父親が後ろで金網をぐらぐらと揺らしながら「池上さん、負けているのですよ。ちゃんと言ってくださいよ」と叫んだ。池上氏はその父親に「甘やかしているわけではないですよ。私はもしかしたら日本一厳しいコーチかもしれないですよ」と言った。なぜ厳しいかという、子どもたちが今、どのような状況になっているのか自分たちで気づく必要があるからである。池上氏の指導は、子どもたちが自分で気づき判断することを追求している。

### 3. 「怒らないスキル」を方法論ではなく原論で

子どもの能力を解放するには、子どもが自分で判断できる環境が必要であり、そのためには子どもたちに任せなければならない。勝つために大人が命令していると、状態が悪い時には子どもたちが集中していないように見え、結局は根性論で怒ってしまう。その結果、子どもたちは自分で判断ができなくなる。

スポーツの指導者の中では「自分で考えさせる」ことがトレンドになっていて、コーチたちは怒りながらも一方では「考えろ」と言ってしまう、矛盾している。「怒ることは子どもの成長を妨げる」という原論を理解すると、大人は怒る以外の方法を探さようになる。指導スタイルを変えて成功体験を積み重ねると、怒る必要がなくな

る。教育や子育ては単純ではなく、怒るか褒めるかという二者択一ではない点にぜひ気づいてほしい。

### 4. 何かを決めるときこそ「放牧」せよ

たとえばサッカーのセレクションなど、何かを決める時に大人たちがいかに子どもたちに任せられるかが大事である。私はどのセミナーでも、「子どもが何かを決めるときこそ『放牧』しましょう」と話している。放牧とは、もちろん一緒に考えたり聞かれたことに意見を言ったりはするが、世話を焼かないで、子どもたちに決めさせることである。

この時、特に保護者はダブルバインド(=「二重拘束」、2 つの違う価値観を持つこと)の状態が起きやすい。普段は「楽しんだらいいよ」と言う一方で、進学や何かを決める際には急に「勝て」「頑張れ」と言い出すダブルバインドになると、子どもは最も混乱する。

### 5. 空は果てしない「問うスキル」は方法論ではなく哲学

日本サッカー界に多大なる貢献をしたイビチャ・オシム氏は、指導の中で「俺はこう思うけど、おまえはどう思う？」と選手にいつも問いかけていた。「空は果てしないぞ。おまえはもっと上に行けるはずだよ。上に行くにはどうしたらいいのか？」という言葉もある<sup>1)</sup>。

オシム氏はそのように問いかけながら、わざとチームにカオスをつくり出し、選手が自分たちで切り替え、考えてコントロールするようにしていた。これは私が先ほどお話した主体性がないとできないことである。

今は暴言やハラスメント、体罰などに対しては明確に NG が出されるものの、保護者や指導者の望ましい姿やスタイルが提示されてい

ない。保護者であれば家庭で、指導者であればクラブで、教員であれば学校で、スタイルを変えることをぜひ考えてもらいたい。伸ばす大人の行動は、「問いかける」「傾聴する」「楽しませる」「考えさせる」「余裕を持たせる」と「自ら学ぶ」という、5つの他動詞と1つの自動詞がポイントになる。

1) オシム氏の具体的なエピソードについては以下を参照。

島沢優子,2023,『オシムの遺産—彼らに授けたもうひとつの言葉』竹書房。

#### 参考文献

成田奈緒子,2023,『高学歴親という病』講談社 + α 新書。

## 質疑応答

※質問と合わせて具体的なエピソードをいただいたケースもありますが、一部を編集して掲載します。

**Q** 子どもが小学生の頃から野球を続けて、高校には野球推薦で入学した。ところが「今まで親の圧に逆らえずに頑張ってきた。本当は高校では別のスポーツがしたかった」と急に言い出した。実は今、学校にも部活にも行けていない。親の私たちは圧をかけたつもりはないが、子どもに対する態度に反省の毎日である。子どもがスランプに陥っている時、特に環境の変化等で急に糸が切れたように変わってしまった時に、親はどうあるべきか。

**A** 「圧をかけたつもりはないが、態度に反省の毎日」がダブルバインドであり、子どもは混乱する。まずは子どもに「ごめんね、自分たちは

そんなつもりじゃなかったけれども、『野球頑張れ』と言いきちやったよ」と謝った上で、「相談に乗るから、これからどうするかということもいつでも聞いてきて。その時までにはゆっくり休めばいいよ」と言ってあげてほしい。

子どもが「行けない、もう駄目だ」と言えたことは、子どもが弱みを見せられる親であれたということで、そこは親御さんたちも自分を褒めてほしい。謝ったあとは、「任せたよ、どうするかは一緒に考えよう」というスタンスで「放牧」していく。

もしあまりにも心が壊れているようなら、医療機関に行かなければならない。不安になっている子どもは昼夜逆転していることもあるので、その場合はまず生活リズムを整える。そのような対応を、保護者もいろいろ学んでほしい。

**Q** サッカーの指導者として、全員に出場の機会を作り、みんなでサッカーをすることを大切にしている。しかし、一部の選手と保護者には「勝つために交代しないほうがいい」「あなたには勝つ気がない」と言われる。粘り強く対話を重ね、理解を求めているが、ときどき自分よがりになっていないか不安になる。どのように合意形成を取っていけばよいか。

**A** 指導者が1人で戦うのは大変である。これはクラブの問題であり、まず「このクラブでは子どもをこのように成長させます」という哲学や文化を作る必要がある。「自分よがりになっていないか」に対しては、私は「いえ、そうではない。これでいいですよ」と言いたい。日本サッカー協会(JFA)も「補欠ゼロ」を提唱しているの<sup>2)</sup>、「JFAはこう言っていますよ、育成はこういうふうにやりますよ」と知らせて、クラブで合意形成ができればよいと思う。

保護者に対しては上から物を言わないこと

が大切だ。「一緒に子どもを育てるために、自分たちができることを共に学びましょう」と話して、さまざまな情報を取り入れてぜひ一緒に考えてほしい。

2) JFA グラスルーツ推進・賛同パートナー制度のテーマのひとつに「みんな Play！ 補欠ゼロ」があり、ウェブサイトでは賛同パートナーに認定された具体的なチームの事例が紹介されている。

[https://www.jfa.jp/grass\\_roots/partner/play/](https://www.jfa.jp/grass_roots/partner/play/)



Q 大学生がスポーツをささえられたらよいと考えるが、責任の問題や、指導力不足の問題をどう考えたらよいか。

A 指導にあたり「教えなければいけない」「習わせないといけない」と思わなくてよい。「子どもたちが自分でやってみる」「子どもたちと一緒に遊ぶ」というように、少し違う捉え方をしてほしい。中学生ぐらいになると YouTube やアプリなど、選手が自分を高められる道具がたくさんある。ぜひ自分で考えてできる子どもにしてほしい。その前にまずは大学生自身が自分を省みて、自分はどのように育ったのか、主体的に動いているか。そうではなかったら、そうならないためにどうするかを考えていけばよいと思う。

#### 島沢 優子 氏

筑波大学4年時に全日本大学女子バスケットボール選手権優勝。卒業後、英国留学等を経て日刊スポーツ新聞社東京本社勤務。1998年フリーに。主にスポーツや教育関係をフィールドに執筆。『AERA』で「ブラック部活」というワードを最初に社会に届けた。著書に『スポーツ毒親 暴力・性虐待になぜわが子を差し出すのか』(文藝春秋)、『部活があぶない』(講談社現代新書)など多数。編著に『スポーツの世界から暴力をなくす30の方法』(合同出版)など。2020年より日本バスケットボール協会インテグリティ委員。2021年より沖縄県部活動改革委員。